
χ enoglossia

小雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

xenoglossia

【Nコード】

N0383F

【作者名】

小雨

【あらすじ】

何事にも無関心、無気力を貫く少年とシュークリーム好きな幽霊の話

（前書き）

この小説はそこまで本格的に憑依を題材にしたホラー小説ではないです。

ごくありふれた平凡な普通少年

この少年、学生と呼ぶには若々しさが足りない。

眼は完全にうつろ状態。瞳孔は見事な前線を開花、手足の指先に至っては死後硬直を始める兆しさもある始末。

無気力であるらしい。

いやいや。それももうかなり末期症状に近い。身体のあらゆる箇所が素直には動いてくれない。

唯一、純粹に動作が成立するのは深夜アニメを見る時ぐらいで、TVのスイッチに指が若干なめらかに滑る。

指先は五寸釘で打ち付けられている感覚で、真っ赤な鮮血が流れてくるのを想像すれば多少動く気にもなるものを、錆び付いた指先からは褐色の液体しか出てこないのだとか。

先に断言させて頂きます。

平凡で普通ではあるが、この物語は、自殺まっしぐらな文学的要素が高いストーリーではない。そこまで思考が到達する程に彼はレベルが高くはないし、寧ろ彼は否定派である。

まあ、自殺を躊躇するレベルの人の救済は、私には荷が重すぎるので、私の二の舞を踏まないように　幽霊や何やらの類いとなつて、この世に自縛し続けないように　アドバイス　するしか術がないのだが。（↑さあ、座りなさい。人生とは何であるか、『先輩』が教えましょう。）

エネルギーが足りないから動けないだけであり、貴重なそれを使用

してまで決起する事は、どう考えても赤字、唯のナンセンス。せいぜいプッチンプリンをプッチンするくらいが関の山だろう。

完全な覚醒状態にあった彼を、強制終了させる形での憑依となった。

以上、彼に憑依するまでを記した。

某月某日。午前9時07分

私立韋鷹学園。

保健室ベッドにて。

「明石君。いい加減、クラスに戻ってみたら？」

学校に登校する志は認めるけど、毎日放課後まで天井を見上げるだけじゃつまらないでしょ？」

応答は、彼のうつろな眼球が微かに動くだけだった。

「保健室登校、いつ途切れるか分からないわよ」

口元が僅かに振動するが、何を言っているのか聞き取れない。

「……本当に病人みたい。」

あなた、毎日学校に来る事は出来たじゃない。あと、もうちょっとだから……。もう少し、……頑張りましょ？」

今日も天井は白い。そんな事を考えている。

うう……。あえ。その後は何も感じない。

「……助けて、ええりいいん」

空は蒼青として、雲は白線を描く。綺麗だな。それが僕の思考の限界であつた。

否定も肯定もしない…………。

暫くして、凜々しい幽霊が僕を覗いてきた。

僕はそれに対してツツコまない。

なぜならこの状況下でツツコミを入れるには12MPが^{マジックポイント}必要であり、関西風のノリツツコミでは倍の24MPを消費。帰る事に使用する分を残しておきたいので、エネルギー保存の法則と質量保存の法則から言えば温存が最も効率的である。（注：この人は明らかに間違つた公式の使い方をしています）

足は無いんだな。と知覚するまで、凡そ6s。

人としてエナジーが足りない。死活問題である。

幽霊はちよつと僕の顔を覗き込んで告げる。

「大丈夫ですか？」

「つう……。ああ。つて、君は何者？」

12MPを消費。

「なんか、死んでるみたいですよ」

「そうか……。つて君が言つなよ！」

更に24MP消費。くつ。

『やっぱりおやつはシュークリームが一番だけれど、遠足に持参するのは人としてどうなのか?』と白熱した議論が繰り広げられた後、長い沈黙に突入していた。

沈黙、無音、無秩序。とかく僕はそれらが怖かった。自発的な洞察が始まってしまう……。

呼吸のペース。眼球の動き。性癖。仕草。表情。手の動き。

『この人は何を考えているのか!?』。対人関係においては他者が僕を肯定しているのか、否定しているのか、考慮に値しない存在なのか、気になって仕方がない。

それを打ち消すちつぽけな抵抗を僕は刻んだ。

「……世界は、無数に散在する黒点（不幸や悲しみや絶望）と、ただひとつの白点（幸福）から構成されている。

故に人々がその一つの幸せを強奪しようとする度にまた膨大な量の不幸が生み出されてゆくもの、なのでしょいかね……」

間発入れずに、ひどく透き通って清純な笑い声が聴こえたかと思うと、散々な風に崩れてゆく。

「くすつ。くつくはは……。あはははひひつ。ああー可笑的いっ……窒息する。陸で溺れ死ぬ……」。

……ひつく……いや、ごめんねつ。あんまりにも『真逆』なんですよ。

世の中はね、数多くの、それこそ数え切れない膨大な量の幸福から構成されていて、極微量の不幸がたまにぽつぽつとある位です。近似して、世の中は白点で構成されているとすることも可能でしょう。

黒点は、主観的である場合が殆んどです。個人が『勝手に』、自分だけが不幸であると思っただけです」

こいつは驚きだ。

この理論が正しいものであると証明されれば、『戦争による死者』も『ストリートチルドレン』も主観的な被害妄想に終止され、格段に減らすこともできる。

偉大なノーベル平和賞候補が葦鷹学園に存在したものだ！

「……悲劇は存在しないと？」

論破を目指し、それまで無気力だった僕の身体に一筋の活力が液体燃料のように注ぎ込まれる。

加^{シャー}油！ 意：がんばれ。油を注ぐ感じな漢字。つまり勢いよくがんばれてこと。

「いや、そうは言っていないません。ただ『あなたが自身に期待するような』茶番は起こり得ない。これだけは確約です」

返答は意外なものであった。再び身体からエナジーが抜けてゆく……。

「ぺろり…ふう……。私と、契約しませんか。そのために、わざわざお伺いしたのです。『ゼノクラシア』というものです。憑依させて下さい」

「とりあえず、どさくさに紛れて召し上がったシュークリームの痕跡を口元から拭きとりなさってからもう一度仰って頂けませんか。ところでその前に、冷蔵庫争糖類争奪戦の貴重な戦利品をコッソリと鞆の中に忍ばせていたが為に今日一日の一番の楽しみを訳の解らない幽霊によって無残にも絶たれてしまった哀れで不幸な少年の話。ぜひとも」

「手短に言うと、身体をお菓子……、じゃなかった、お貸し頂きたいのです。あなたを治療するために最善の策だと踏んでいます」

「私を治癒する事は出来ないでしょう……、だって、かすり傷一つ負っていませんから。」

まあ考えておきますよ。こんな傀儡状態植物人間でなければね」

幽霊は保健室を、すすつと退出して、帰っていった。

誰にも知られないところで、あまりにも冷たく凍えた声で、こう呟くのだった。

「……ほんとね、幸福や不幸は、どこにも存在しないのです。世の中に存在するのは、ただの無機質（この場合、C元素の含有を問うものではない）で無形な塊。無色不定形な温度を持たない物質、これのみです。」

これを、こんな真実、告げてしまったら……。あなたはもう、死んでしまうでしょう。

今だってそうです、いえ、あなたに限ったことではありません。

小刻みに、何かに侵食されている。コンピューターウイルスと似ているかもしれない、あなたの言葉を借りて言うなら、点という奴です。

幸福や不幸は、人間が事実の主観を着色して作り上げてゆくもの。絵筆をかざすことを完全に放棄してしまっている状態、それが『黒点思考病』のカルテなのです。

もしくはゲル状で深く暗い沼に沈んでしまっている……。

皮肉にも、無意識に自身で作り上げてしまった幻想の中に、未だ閉じ込められたままです。

確かに音や光は存在する、頭では知覚していても肌で感じる事ができない。

……昔の私にそっくりです。

ようやくふさふさもふもふして柔らかい純白の翼を手に入れたときには、すでにこの有様なんですよ。

……ははっ。愚かですよ。

……人間……話せば理解^{わか}り合えるのに……。一人で抱え込まなくたってよかったのにね……。

綺麗に蒼い空を泳ぐことも、静かな木陰で白羽を梳くことも、私にとっては、全てが終焉を迎えてしまっているんです。

生きているということはすばらしい事、生前私が受け入れるのもむず痒く皮膚炎さえ起こしてしまったこの言葉を、一刻も早く。あなたが、無の境地に達する前に。

あなたなら……」

徐々に水位が上がってくるのを、待つことしかできない人生。そんなもののような気さえする。完全に密閉された部屋で、床の底から冷水が満ちていく。指先ひとつ動かすこともせず、ただあっけらかんと天井を見上げて、小さな金網の隙間に想いを馳せる。望めばわざと仰向けになって溺死を早めることができるというが、身体を動かすことすら億劫だ。死を待つわけでもなく、嘆くわけでもなく、気付いたときには眼の高さまで液体の体積に侵食され、微かな涙までもが水位を上昇させる。

そんな『茶番』は彼によって阻止されたのだという。いや、元から起こりえないのか。

ゼノクラシア。幽体や妖精はたまた悪魔などが生身の实体に憑依することを意味するが、この契約自身が何を暗示するのか分からない。

全てが止まったままで漂う。確かに音や映像は存在するものの、僕の考慮に値しない。あるのは嘔吐感だけ。なまあたかいものに全て体温を吸い尽くされ、存在すらむさぼられつつある。松代^{ぼく}明石の

安否は現在も不明である。ああああががががが。何なんだろうね？

末期患者のカルテのようなものは存在するのか。在るのならば、教えて頂きたい。

僕は死んでいるのか。

生きているのか。

初期症状は？

末期症状は？

虫が皮膚を這っている感覚がする。寄生虫かも知れない。内部に寄生されるのであろうか。卵を産みつけるのであろうか。僕は膿だらけになってしまう。が、しかし、肝心の姿が見えない。だから、ただの妄想のようだ。当タリ前田ノクラッカー。

人生楽ありや蜘蛛あるさ。精神分裂寸前かはもしいれまふえん。

(以下妄想を認めた)

負けましたよ。ええ、自分自身にね。乾杯(完敗)、ぱーふえくと

the 敗北。

「もう、人生オワタかも。どーでもいいか、憑依とか。」

おれのターンおれのたーんおれのたーんおれのたーんおれのたーん。

H A N A S E

ははは、もうずっとおれのたーんだZ E。おれのたーんおれのたーん。おれの

ブチ。プーッ。プー。

それから長い時間、眠っていたような気がする。深い、心の奥底で、別の誰かが動かしている身体の内部に閉じこもって、とても静かな時間を過ごした。とても暖かく、閉鎖的で守られた空間にうずくまって。

ぴっ、っピッ、ピッ、p

気がつくと、白いベットで、意識が消えうつせる前保健室に居たときとなんら変わりなく、白い布団を羽織られて白い天井を見詰めている。医療器具……、と思われるものが、全身くまなく装着されていた。プラスチック製のマスクと、腕にはチューブがはめられていて、ピツピツと一定感覚で心拍数が測定されている。

「もしもし、お電話接続しました。はい、こちら7階東病棟ナースセンターです。はい、ええ765号室の松代 明石さん、ですか。面会。……そうですね、この間『面会謝絶』を解除されたばかりなのですが、はあ、そうですね…… 様態のほうがですね、仰って頂いた次第で……」

あのつ、『直ぐにいらっしゃってくださいね』」

察するに、どうやらここはQ病院765号室、ナースセンターの隣、もしくは声が聞こえるほどの距離を置いた場所らしい。何の病気が怪我が分からないが、おれはこの患者で もう長くはないらしい。

「すす、ふー、はー、ふ、ひ」

発音すらままならない。喉はもはや酸素の供給で手一杯であり、言葉を放てない。

ざまをみなさい。明石。コレが末路である。

おれは、どうしていいのかわからない。死ぬとしたら、どうして死ぬのかさえ分からない。

「そうですね、先生。765号室の明石君は今日3人面会予定が入っています」

「うーん。そうですね。残念ながら彼は、もう今日か明日、三日もてばたいしたものです。」

その……途上国から帰ってきてから直ぐに潜伏していたと見られる感染病が発症しまして。なにぶん、日本で専門医もあまりいなか

つたし、治療薬も海外の未認定のものだったから取り寄せたり使うのを躊躇したりして（未認可であると保険料が利かず莫大な使用料を取られるから）、治療は遅れてしまつてね。拳句の果てに地方独特の風土病だったから、現地の詳しい資料の翻訳に時間がかつちゃて、空気感染はしないと判明するまで、些かの期間隔離までしてしまいました」

「へえー。そうだったんですか。まだお若いのに…… 27でしたっけ？。」

ところで、現地では何をなさつていらつしたのですか？」

「教師をしていたらしいよ。なんでも、生徒想いのいい先生だったらしいね。病院側にとっても改善に非常に協力してくださった方です」

「ふううん。……つてあれ、お客さんですね」

「あのお、すみません。松代 明石君の面会に来たのですが」

「あつ……はい。ではこの書類に記名をお願いします」

面会1人目 大矯 徹。

年齢 56・面会理由：（空欄） 職業：（空欄）

住所：東京都・市（ry

コンコンつと病室の扉をたく音がする。

「失礼します。…… お久しぶりです。覚えていますか？

ええと、お見舞いの造花とフルーツ ここに置いときます。……とは言っても、もう喉に入る状態ではないとは思いますが……。形だけ、ね」

ピッピッと僕の心臓は一定の鼓動で連動する。

「あなたに助けて頂いた娘は、昨年目出たく結婚をしまして。今は病院で出産の準備をします。あなたに助けて頂いた命は、現在も

連鎖しているということです。何年先も、何世代先までね。本人が直接面会をしに参るのが筋ですが、代理をもつて代えさせていただきます。かく言う私自身もあなたの男気に惚れてましてね。へへっ。

娘は、利発でよい子でした。あの、今は婿のもとにいたので過去形です。悔しいですが。

あの気違い（通り魔）に狙われて、娘は本当にあのまま死んでしまった。……そう考えると本当に恐ろしい……。無差別に人を殺傷する、それだけでも十分に恐ろしいですが。

無論、人に刃を向けるという行為自体も恐ろしいことです。

しかし、あの日に娘が狙われたのは、突然に包丁を持った男が現れたことに動揺した周囲に巻き込まれ、『履いていたハイヒールの踵が折れて逃げ遅れた』。たったそれだけなんです。

それが、娘が殺されかけた理由です。

娘は恐怖のあまり立ちすくんで動けなくなつて、とうとう距離を詰めた通り魔の包丁が、娘の頬を掠りました。

集団は逃げるのに必死で、ああ、犠牲者が出たな、と生暖かい哀れみの目を向けるだけでした。

しかし、あなたは違った。逃げ惑う集団に対して全く逆の方向に進み、『一発もらいに行った』。幸い、通り魔は予想だにしない反応にひるんで、警察に通報されていることに気付いて逃げていった。そうして、あなたは右脇腹に傷をもらつたらしいですが、大事には至らなかつたようです。

あれから、もうだいぶ時が流れました。犯人はまだ捕まっています。今後おかみも逮捕されることはなく、風化を迎えるでしょう。なんでも、警察は誰かが死なないと張り切つて捜査してくれないらしくて、まあ、娘も掠り傷で済みましたし、あなたもそこまで犯人特定に強くは期待しないようだったので、これでよしとしています。

実を言つと、あなたはあなたで、おいしいところを逃してしまっていたんですが。あの事件直後、精神的に参っていた娘を支えたのが今の婿です。うつふつぶ、残念でしたね。

では、長話もなんですし、私はこれにて。おいとまさせて頂きま
す。最後に、これは全員からの言葉です」

「ありがとう」

そう言い終わると荷物を纏めて、退出していった。僕（僕の身体
？）はいつのまにかそんなことをしていたらしい。うーん、と
りあえず Good Job だ。

微かだが、少しだけ心が活力で満たされていく気がした。指だって
動かせるかな、と意識を集中してチャクラを練ってみたら、第一関
節が僅かに震えた。

暫く鮮やかな蒼い空をばけつと見ていた。すーっと綺麗な飛行
機雲が描かれて行くのもまた、心を高揚させたかもしれない。

「スミマセン。アカシ、アカシの入院してる病室はココですか？
面会シタイのデスが」

「……はい。では、署名をお願いします」

面会2人目 M・Robert a

年齢 25・面会理由：仕事上の理由

職業：教師

住所：●●共和国エリア11（ry

コンコン

扉を叩く音がする。

「……オオ、アカシか。死ニソウジャン。アア、あの病氣二かかつ
ちやったのネン。お気の毒ニ。」

学校では、ミンナ子供たち、アカシ、アカシって早く戻ってきて欲
しいみたいダヨ。

……昔は学校デキル前、あそこは酷かった。

井戸もなく、食べるものも少ナイ。

子供たちは、みんな働きっぱなし。カカオを毎日獲ル。学ぶことも遊ぶこともままならナイ。皆カカオを何のために獲るのか分からナイ。カカオが何に使われるのか分からナイ。

でも、学校が出来タ。とりあえず、給食があるから食べるために学校に来ル。

学校ではいろんなことが学ベル。どんどん子供たち賢く逞しく心豊かになってユク。

アカシも教師の一人でしたネ。覚えてるよネ？

『学ぶことは心が豊かになることだ』って言ったのはアカシだよ。

最初は言葉が通じなかったけど、信念の力は凄かった。

でもアカシ言ってる事は立派だったけど、ズル賢かったのネン。

ダメダヨ放課後に生徒に変な事吹き込んだンジャ。

まず、カカオっていうのはチョコレートになることを教える。次に日本って言うトテム金持ちの会社が一杯あることを教える。そして、日本には二月には ばれんたいんでー ッテいうとつても残酷な戦争があることを教える。あ、このとき確か武器はカカオから作られるチョコレートっていつてたネン。日本はその時期になるとチョコレートが一杯売れるから、『武器』を売るのをスト（ライキ）するといいつて。かき揚げ時に売れないと困るから、給料少しは上がるって。そしたら、生徒たち、それを学校に来てない人にも教える。ミンナにおしえる。

ミンナでストライキするネン。蟹工船みたいだね。

でもアカシ、日本には戦争ない。それどころか、今年はチョコの値段上がってキャバジョーからチョコレートもらえなかったヨ。あんなに通つたのにネン。ドウシテケレル？ アカシ。まあ、三倍返し（宝石or現金）しなくて済んだけど。

あつっそうだ、ほら、子供たちのビデオ撮ってきたネン。この子達日本語知ってる、特にお気に入り日本語はアカシ。手紙もある

ヨ。どうでもいいけど、最初に日本に来た時兵庫まで飛ばされて大変だったネン」

ビデオの液晶パネルには満面の笑顔で学び、遊び、喋り、歌を歌ったりしている子どもの姿が映っていた。ほんとうに、輝いている。この子達は、ホントにもう……。

手紙のほうは、この人が翻訳してくれた。おれは、おれは。こんな偉大なことを、果たして。

「どうだった？。」

また元気になって子どもたちと一緒に学校クルといい。

じゅあ、ワタシ、そろそろ退出します。A d i u

あつと、そうだった。ミンナの想いを置いていくネン。お大事に――

「ありがとう」

放った言葉には膨大な魔力があつた。人を元気にする、人を勇気付ける、何かとんでもなく素晴らしい力。^{もの}

息も絶え絶えだった先刻に比べ、呼吸の通りが少しだけ軽くなった。何かから解放されて、とても心地良く爽快な気持ちがして、視界が猛然と晴れてきた。

全てのものを受け入れる覚悟。つまりは、これなんだな。

運命とか定めとかではなく、全ては作っていく、切り開いてゆくものなのかな。

「面会、お願いします」

「もしかして、西……ですか。うううん。しょうがないですね。正直、患者さんは最期が近いですから。もし万が一何かあった場合の

責任は私がとりましょう。

でも、もう最近はいだいぶ友好的になりましたし、何も心配ないはずなのですが。

……その、たまに残党があつたりして。

分かりました。署名をお願いします」

「私も、責任取りますよ。何か面白そうだし。それにいろいろと感謝していますしね。まあ、今更東西で難癖つける方はもう存在しないはずですが。ほら、二人分の辞表届け」

「先生！ なに私の分まで書いてるんですか」

「どうせ書くんでしょ？」

「ありがとうございます。お仕事頑張つて下さいね。」

「

「本当は、こんな確執、存在自体が時代遅れのフィクションなんですけど」

「どうだろう？ でも彼女たちのおかげでだいぶ病院もよくなったんですよ。」

「いつてらっしゃい、海原さん」

面会3人目 海原 淘子。

年齢 24

面会理由：（空欄） 職業：（空欄）

住所：（空欄）

追記：『西病棟、と記載してあるが斜線が引かれている』Q病院患者

クラシケ

コンコンと扉を叩く音が聞こえる。

最後の面会者である、柔らかく優しい音が、静かに、けれど暖かく響いた。

「こんにちは。

うーm。綺麗な生花。花瓶の水、代えてくるね。造花ももらった

の？」

彼女はそう言って出て行った。蛇口をひねる音の後、透き通った新鮮な冷水が、透明な花瓶に注ぎ込まれてゆく。まあ、ここからは見えないから、だいたいそんな感じのイメージかなと想像した。軽い足音がだんだんと近づいて、病室に戻ってくる。

病室の仕切りを再び超えると、淡く白い病着の女性は、シャーツとカーテンを開いて、カラカラとなめらかに 広大にそびえる快晴とのたつたひとつの隔て 窓ガラス を開け放った。冷たく澄んだ空気と、ある日の午後のゆったりとした陽が入り込んでくる。

『新しい風』がこのQ病院東病棟765号室へ吹き込む。

「ああーきもちいい。うーん、いい天気ー」。外の世界は、いいねえー。どっか行きたあーい。あの世以外。もーっ。何で黙ってるの。ねえ。

はあー、分かつてはいたけど、遂にあなたへ来たのね、順番が。

……そうか、何か話そうかな。

このQ病院は、3階から西病棟と東病棟に分かれていて、医局によつて分担がなされていた。西棟はD医科大学出身の先生、東棟はP大学出身の先生が多かった、いや、ほとんど固められているのかしら。西は脳医学とか、東は心臓とか、学閥によるしきりが引かれた。ドラマとかじゃないんだから、とか最初は思った。でも、やっぱり伝統やしきたりって言うものは改革者がいないとなかなか風化されていなくて。このままだと『また』何か問題も起こりかねないから、仲良くやっていきたいな、って思っている先生も大勢いて、何度も問題は起こっていたわ、いいえ、そんな状態で起こらないほうが不自然よ。西に入院していた糖尿病のクランケ、合併症の専門が東の管轄で手術が必要だったんだけれど、西はわざわざほかの病

院に回しちゃったり。東も、学会を開くとき西の先生を全然呼ばないで勝手に開いちゃうし。

そついう私も、後天性免疫不全症候群で入院したわ。西棟に。

最初は脳への浸食がなされると思っていた。けれども、ヒト免疫不全ウイルスはいろいろな合併症を引き起こしやすくて……、片目……見えなくなっちゃった。中枢神経もボロボロにされかけて、肺も危なかったとき、……あなたが助けてくれましたね。

『人間、話せばわかり合える』

あなたの口癖に、私はどれだけ救われたことでしょうか。世界はどれだけ変わったでしょうか。

……えへへ、今ちよつと思ひ出して、カッコ……よかったなつ、て……。

西棟の先生で、当時私の担当医だった先生に石崎先生という医師がいて。

その先生は、前に一度、論文を東棟の先生に猛批判された挙句に、足裏で踏み付けられたっていう経験から、東棟に対して失望し、完全に信用を無くして仕舞っていました」

扉一枚挟んで、廊下にて。

「ええつつくつす」

「くしゃみのつもりですか先生？」

何ですか、Xって！

プロレス技ですか？

それともプロジェクトの方ですか？」

「ほら、でも一応折角私が話題に出たわけだし。お約束ということ」

「私達、765号室のドアの前に立って、盗み聞きしていて本当にいいんでしょうか」

「盗み聞き、と言うのは単なる一つの結果に過ぎない。私は明石君に何かのことがあつたらすぐに医療行為をしなければいけないし、

それにどこからか噂を聞きつけた東西に固執する先生方を身体（特にくびですね、最悪明日から職安かな）をつかって、阻止せねばなりませんまい」

「なんで事前に対策を練らなかつたんですか？」

「ごめん、当直続きで頭がボーっとしてしまつて」

「^{エイズ}AIDAウイルスは起爆剤のようなものだから、ちょっとした風邪でも直ぐに高熱になるし、免疫能力自体が弱くなつてしまふ為肺炎とかにかかつたら大変なんだけど。

ある日、それが起こつてしまいました。事態は急変、早急な対応が必要とされます。一刻もはやくレントゲンを撮つてもらい必要とあらば手術に踏み込みたい。しかし、内科 呼吸器科は東の管轄でした。

……石崎先生は、迷いました。

このクランケは、別の病院に引き渡したほづがずっと良いのではないか？

果たして本当に、東に応援を頼んで動いてもらえるのだろうか。ボイコットされたら？

……いや、まさか、いくらなんでも医師が、一刻を争つて苦しんでいる患者にそんなことをする訳が……。だいたい、東棟にいる先生だつて、西棟（こし）にいる先生だつて、出身大学が違ふだけであつて、患者さん（かんじゃ）を治療することに喜びを感じ、元気な姿で退院してくれることを強く望んでいる、誇り高く立派な医師ではないか！ どうして躊躇する理由がある？

しかしその瞬間、論文の事が。一瞬ちらついたその光景。もしもモノがヒトに置き換わつたら？

……避けるべきリスクや、その後の技術量と設備の差、敢えてこの状況下において時間を投資しても獲るべきものがあるのではないか。もともとこの子をくだらない対立の渦中に置いておくなど、甚

だ間違っていたのかもしれない。

「よし、ほかの病院に『おまかせ』しよう」

そう決断して、震える冷たい手が受話器を握った時、先生は酷く自分自身を見下していました。

もはや『医師であるかどうか？』と云う以前に『人として……』

少なくとも、あなた、松代明石が流れを断ち切るまで。石崎先生は、そんな懷疑の中にいました。誰の声も届かず、自分の判断に固執し、『自分だけが』と嘆くように吐き捨てる。孤独。そんなかつこいいものじゃなく……、ただの……。

そこに現れた救世主、それが明石君^{あなた}です。

受話器を取る先生の手を握り、一冊の本を机に広げました。

その year note と記された分厚い本は、いわゆる医学生にとって辞書のようなもの。

学生時代から愛用していた先生は、後に働くきっかけとなったこの病院に研修してきた時も肌身離さず、今でも必要とあらば活用したり、懐かしんでパラパラとめくったりしている代物です。

ページを捲ればラインマーカーの嵐。印字の余白部分は隙間なく小さい文字で黒々と埋め尽くされ、何十枚にもわたる付箋。挟み込んだノートの切れ端が今にも抜け落ちてきそう。

石崎先生は、必死に勉強して医者になりました。

あまりパツとしないタイプで、受験でも多浪を経験して、要領もよい方ではなかった先生は、人一倍努力というものの価値を知っています。苦しんでいる人の痛みもわかります。

先生がなぜ努力を怠らなかったのか？

それは、人を治すことが好きだったからです。人に笑顔になっても

らせることが幸せだったからです。

付箋にはこう書き込みが。

。。さん 6月21日 退院。 定時制普通高校に復学。

さん 9月15日 転院。 K病院ならきつと完治する。

（赤字）退院。 元気に××会社で働く。

……さん ……

「……これ、先生と付き合いが長い看護師さんに渡されました」

「はい。決心しました。明石君、ちょっと私は東棟に行つて、頭を下げてきますので、海原さんにこれ以上の発作があつた場合は看護師さんの指示にしたがつてください」

「急いでください」

石崎先生にとっては信じられない、当たり前わたしの光景でした。

石崎医師が頭を下げた先生が、次々と患者さんのために協力してくれます。

ある者は資料を調達し、あるものは手術のできる医師を呼んできてくれました。

結局、緊急手術の末、私は無事にこの通りです。

片目が見えて、手を動かせ、自由に歩ける、そんな今。

決して不幸ではない。むしろ、しあわせです。とっても。

あなたがやったのは、ただ先生の昔使っていた教科書を机に広げただけです。

ただ、時として、ほんの小さな行動にも人は莫大な勇氣と行動力をもらうことができる。

そんなことを、教えてもらえました。

あのとき、あなたの小さな行動がなければ、私は、両目失明をしていたかもしれない。もしかしたら手遅れになつてしまっていた、そんなifも大げさではないかも」

廊下にて

「ちなみに、あの時の看護師さんってまさか……。やっぱりあなたですよ？」

「さあ……。どうでしょう。でも、あなたは、口調は軽くて一見苦勞知らずのエリートって風貌ですが、実はすごく優しくて努力家な人物である、と分かっているのは私くらいじゃないですか？……」

「結婚しよう。ぜひとも」

「丁重にお断りしますよ」

誰かが駆けてくる音がする。

「あれは、『東棟』の藤堂先生じゃ……。まずい」

その人物は何かを言いながらこちらに向かってきている。

「おおおーい。石崎君」

「来ましたね。覚悟はできていますか？」

「大丈夫です」

ちょうど、石崎先生が辞表片手にラリアットの体形を取ろうとしたときだった。

「石崎君、論文読みましたよ。素晴らしいじゃないですか。早速、次の学会で発表したまえ」

「……はあ……。ありがとうございます」

想定外の発言に啞然とした態度を取りつつも、発言の意図を理解し石崎先生はガッツポーズを取るまでの歡喜に満たされた。

「次の学会は、時期的に……間に合わないか。では、その次の回になる訳だが、……まだ開催地が決まってなくてね……。もしかして、少し遠くなるかもし……」

「じゃあ、ウチが候補地として立候補すればよいのではないのですしょうか？」

発表者もいますし、規模も小さなものですし」

「……そうか、その手があったか」

「そう、あれから一年が経ちました。あれから、あなたと知り合って、毎日。散歩やくだらないうことのお喋りがとても楽しかった。

先生方も東西の確執にあまりこだわらなくなって、ほとんど垣根はなくなりました。

たぶん、石崎先生の情熱に、動かされたんだと思います。

そして、勇気を与えたのはあなたの小さな小さな行動。

ちいさな、ちいさな火。だけれども、とても大きな勇気から出た、膨大な可能性。

私たちを団結させるために必要なものでもあった。

患者全員で一丸となつて、デモをやったり。病棟でレクリエーションを催したり。

私は、もう不幸なんてどこにもないんだなうて思っていた。人間話合えばわかるんだなうて思っている。それが今です。

いつかこの瞬間ときが来ることは覚悟していた。

・・・でも・・・死なないで、ください。

・・・また私、一人になっちゃう。だから、ね？

・・・死なないで。お願いだから、私を置いて逝かないでよ・・・

┐

ぴっぴつと無感情な機械音が一定のリズムを保ち続ける。

あたたかい液体が僕の頬をなぞる。透明で、美しい。そして、なによりもあたたかい。

窓の方に視線を動かすと、『新しい風』が吹き込んでいる。皮膚がそれを感じる。肌が蘇生していくような感覚であろうか、錆びついた泥人形から放射状の光があふれ出てきた。

唯一、口元が動いた。

「……あなたは、独りじゃありません。

……石、崎先生……や、…多くの人に…支えられて…生きています。

…だから、…泣かないでください。…どうか、…笑って……」

そう言い終わった後、身体全ての力が抜けおちて、深い眠りに落ちてゆく、衝動にかられた。

彼女はナースコールを押した。私は深い眠りに包まれてゆく。

「……目を……あけ……て……ねえ……生き……よう……よ。
……あ……りが……と……う。」

溺れている水の中から声を聞くような感覚がしばらく続く。

おれは、死んだ……。

浅黒い闇に包まれた後、濛々と視界が解放された。

長い長い階段を上っている。病着のまま裸足で。一段一段、踏みしめるように。その足裏が感じる感覚はひんやりと湿っている。上がり終えた、先に見えるのは虹色に照る光。走馬灯のようにこれまでの思い出が込み上げてきて、階段の一段ごとに涙を滴らせる。吐息は白色をなして、少し身体が汗ばんできた。もう少しだから、とせかす声がする。あの、幽霊を思い出させた。最後の一步を踏み出すと、おれは光に向かって完全に到達した。

「リーム、もってきましたよ」

はっ、と気づいたころには、葦鷹高校の保健室の白い天井を見上げていた。

何も起こる前の状態。結局何も起こらなかったのか。

「単なる、白昼夢ではないのです。あなたの人生の最期をお見せし

ただけなのです。っていうか、その前にシュークリーム食べますか？」

よくもまあ、ぬけぬけと。

「僕はね、あたりまえの毎日をつまらなそうに生きている人が嫌いなんです……。なぜかっていうと」

おれは今、訳のわからない状態から生還し、幽霊に説教をさせていただいている。

突然、しゃーっとカーテンによって封鎖されていた空間に、保健師の先生が入り込んできた。

「明石君。下校時刻です。もうかえり……」

絶句。幽霊を前にした普通の人の対応です。

「圭太くん？」

そのまま気絶すると思われた先生が、幽霊に話しかけている。

「……先生、あの時は、申し訳ございませんでした。」

あの頃は、周りの人皆が僕のことを理解してくれないと嘆き、勝手に不幸ぶっていました。

つまらないことで衝突し、次第に人間がわからなくなってゆきました。

でも、自殺してしまったあと気づいたんです。家族や親せき、少ないながら友達も僕のことを気遣って泣いてくれました。

僕は、本当に幸せだったんだあって。

それと、学校の屋上から飛び降りにも関わらず、後々の処理や責任の事も考えずに、必死になって生存を祈り続けた先生方も」

彼は、数年前、この学校の屋上から飛び降り自殺した。その未練がまだ、ここに自縛し続けていた、とか。

「この子、そっくりなんですよ。僕に。」

でも、僕が灸をすえておきましたから、明日から真面目に授業に出席すると思います。

先生、この子のこと、少々厄介だとも思いますけど、面倒をよろしくお願いします。

しつかり更生させてやってください」

そう言ってから、彼は上へ上へと、天を仰いでいった。
成仏した、のか？

寂れた校舎の日陰に、小さな小さな碑が。

あれから明石は教師になることを決めた。見せてもらった映像も夢と同じでいつかは忘れてしまいかもしれないが、当分の間のエネルギー補給には充分だった。

そうして明石はその小さな碑にしゃがみこんで手を合せ『ありがとう』と呟くのだった。

(後書き)

教科書 92 p

発展例題：やってみよう

問：以下の公式を用いてエネルギー総量を求めてみよう。なお、単位は MKS とする。

$$M P \int (i M @ S) d @ + V s$$

$$G P \parallel (オレ) \cdot$$

注：V は妄想速度。s は時間。還らぬ人となった場合は無限遠方に到達した時点を基準とする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0383f/>

x enoglossia

2010年10月28日08時50分発行